

鞆

安部 公房

雨の中をぬれてきて、そのままずっと乾くまで歩き続けた、といった感じのくたびれた服装で、しかし目元が明るく、けっこう正直そうな印象を与える青年が、私の事務所に現れた。新聞の求人広告を見たというのである。

なるほど、求人広告を出したのは事実である。しかし、その広告というのが、なにぶん半年以上も前のことなのだ。今ごろになって、ぬけぬけと応募してくるというのは、いくらなんでも非常識過ぎる。まるで採用されないために、今日まで応募を引き延ばしたと言わんばかりではないか。

あきれて物も言えないでいる私をしり目に、

「やはり、駄目でしたか。」

と、むしろほっと肩の荷を下ろした感じで、来たときと同じ唐突さで引き返しかけるのだ。はぐらかされた私は、つい慌てて引き留めにかかっていた。

「まあ、待ちなさい。私だってこだわるのが当然だろう。なぜ半年も前の求人広告に、今更応募する気になったのかな。そのところ

を、納得できるように説明してもらいたいね。納得できさえすれば、それでけっこう。ちょうど欠員ができて、新規に補充も考えていたやさきだし、考慮の余地はあるんだよ。いったい、どういうことだったのかな。」

「さんざん迷ったあげく、一種消去法と言いますか、結局ここしかないことが分かったわけです。」

言い方によつては、かなり思わせぶりになりかねない口上を、青年はさりげなく言つてのけ、私も妙に素直な気持ちになっていた。

「具体的に言つてごらんよ。」

「この鞆のせいでしょうね。」と、相手は足元に置いた、職探しに持ち歩くにはいささか不似合いな――赤ん坊の死体なら、無理をすれば三つくらいは押し込めそうな――大き過ぎる鞆に視線を落とし、「僕の体力とバランスがとれ過ぎていゝんです。ただ歩いている分には、楽に運べるのですが、ちよつとでも急な坂だとか階段のある道に差し掛かると、もう駄目なんです。おかげで、選ぶことのできる道が、おのずから制約されてしまうわけですね。鞆の重さが、僕の行く先を決めてしまうのです。」

私はいささか氣勢をそがれ、

「すると、鞆を持たずにいれば、必ずしもうちの社でなくてもよか

ったわけか。」

「鞆を手放すなんて、そんな、ありえない仮説を立ててみても始まらないでしょう。」

「手から離れたからって、べつに爆発するわけじゃないんだろう。」

「もちろんです。ほら、今だってちゃんと手から離して床に置いている。」

「分からないね。なぜそんな無理してまで、鞆を持ち歩く必要があるのか……。」

「無理なんかしていません。あくまでも自発的にやっていることです。やめようと思えば、いつだってやめられるからこそ、やめないのです。強制されてこんなばかなことができるものですか。」

「うちで採用してあげられなかったら、どうするつもり。」

「振り出しに戻ってから、また改めてお願いに上がることになるでしょうね。地形に変化でも起きない限り……。」

「しかし、君の体力に変化が起きるとか、鞆の重さに変化が起きて、ぜんぜん歩けなくなるとか、宅地造成で新しい道を選べるようになるとかすれば……。」

「そんなに僕を雇いたくないんですか。」

「可能性を論じているだけさ。君だって、もっと自由な立場で職選  
びができれば、それに越したことはないだろう。」

「この鞆のことは、だれよりも僕がいちばんよく知っています。」

「なんなら、しばらく、預かってみてあげようか。」

「まさか、そんなあつかましいこと……。」

「中身は何なの。」

「大したものじゃありません。」

「口外をはばかれるようなものかな。」

「つまらないものばかりです。」

「金額にしたら、いくらぐらいになるの。」

「別に貴重品だから、肌身離さずってわけじゃありません。」

「しかし、知らない人間が見たら、どう思うかな。君はそう、腕っ  
節の強いほうでもなさそうだし、ひったくりや強盗に目を付けられた  
ら、お手上げだろう。」

青年は小さく笑った。私の額に開いた穴を通して、どこか遠くの風  
景でも見ているような、年寄りじみた笑いだった。

笑っただけで、別に返事はしなかった。

「ま、いいだろう。」私も負けずに、声を立てて笑い、額に手をあてがって相手の視線を押し戻し、「別に言い負かされたわけじゃないが、君の立場も、なんとなく分かるような気がするな。いちおう、働いてもらうことにしよう。それにしても、その鞆は大き過ぎる。君を雇っても、鞆を雇うわけじゃないんだから、事務所への持ち込みだけは遠慮してもらいたい。その条件でよかったら、今日からでも仕事を始めてもらいたいんだが、どうだろう。」

「けっこうです。」

「勤務中、鞆はどこに置いておくつもり。」

「下宿が決まったら、下宿に置いておきます」

「大丈夫かい。」

「どういう意味ですか。」

「下宿から、ここまで、鞆なしでたどり着けるかな。身軽になり過ぎて、途中で脱線したりするんじゃないのかい。」

「下宿と勤め先の間なんて、道のうちには入りませんよ。」

青年はやっと、表情にふさわしいさわやかな笑い声を立て、私もほっと肩の荷を下ろした思いだった。知り合いの旋屋に電話で紹介してやると、彼はさっそく下見に出向いていった。ごく自然に、当然の成

り行きとして、後に例の鞆が残された。

なんということもなしに、鞆を持ち上げてみた。ずっしりと腕にこたえた。こたえたが、持てないほどではなかった。試しに、二、三歩、歩いてみた。もっと歩けそうだった。

しばらく歩き続けると、さすがに肩にこたえ始めた。それでもまだ、我慢できないほどではなかった。ところが、急に腰骨の間に背骨がめり込む音がして、そうなるともう一步も進めない。気が付くと、いつの間にやら私は事務所を出て、急な上り坂に差し掛かっているのだった。方向転換すると、また歩け始めた。そのまま事務所に引き返すつもりだったが、どうもうまくいかない。いくら道順を思い浮かべてみても、ふだんはまるで意識しなかった、坂や石段に遮られ、ずたずたに寸断されて使いものにならないのだ。やむをえず、とにかく歩ける方向に歩いてみるしかなかった。そのうち、どこを歩いているのか、よく分からなくなってしまった。

別に不安は感じなかった。ちゃんと鞆が私を導いてくれている。私は、ためらうことなく、どこまでもただ歩き続けていればよかった。選ぶ道がなければ、迷うこともない。私は嫌になるほど自由だった。